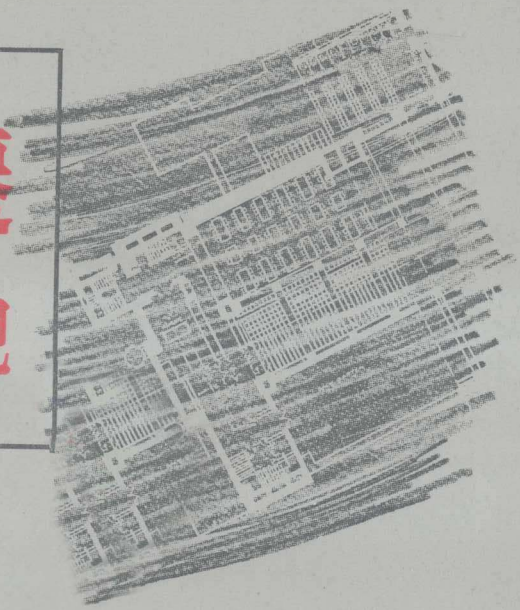
左遷

咲村 観

筑摩書房

左遷

咲村観



筑摩書房

左遷

昭和五二年一〇月三一日第一刷発行
昭和五二年一二月二〇日第五刷発行

著者　咲村観（さきむらかん）

発行者　岡山猛

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京六―四一二三
郵便番号一〇一―九一
多田印刷・積信堂製本

©K. Sakimura. Printed in Japan 1977

0093―80170―4604

左

遷

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

昭和四十四年七月末の夜のことである。
大阪は、淀屋橋の近くにある東洋通運の八階建のビルの上部四階に、珍しく灯がついていた。時刻はすでに九時を廻っている。
役員室や社内の主要各部がある五階の事務所のなかが、特に、人の気配でざわめいていた。堂島川に面した窓辺の一郭に位置を占める開発部開発課では、課長の杉本啓介と五名の建築関係の技師が、六階の事務所の奥の特別会議室で開かれている役員会の議題審議の結果を待っていた。堂島川をはさんで梅田寄りの対岸にある会社所有地七千坪に、地上三十階建地下四階建の新本社ビルを建築するという議題についてである。この件は、過去二回にわたり役員会に附議され、審議未了のまま今日で三回目を迎える。
「今日の役員会で決まらんことには、一年後の着工に間にあわんぞ」
部長席の椅子に背をもたせて坐っている村山開発部長が、啓介に話しかけるようにつぶやいた。四十二歳、中肉中背で髪の黒々とした部長には若さが感じられる。
啓介は椅子ごと体を半回転させて、部長の方を向いた。
「そうですね、物流加工用の倉庫施設をつくるという案は、前回の役員会で業務の波動性と低収益

ということで否決され、事務所ビル一本ということに、ほぼ営業部サイドの考えは、まとまっているはずなんですがね。また、今日の役員会でむしかえされているんですかな」

啓介は、部長の問いかけに長足を伸ばし、椅子に背をそりかえらすようにして答えた。油っけの少ない髪が、色白の彫りの深い顔のうえで、わずかに揺れる。

「営業部や物流開発部がどういう考えで、あの土地に倉庫営業施設をつくると主張するのか、俺は理解に苦しんでいるんだ。市内への大型車の乗入れ規制が、将来の方向としてはっきり打ち出されているに拘らず、ただファッション関係の会社や商社が、百貨店その他の販売店への繊維製品の納入に便利な場所に、物流加工施設（商品の保管、調品、値札つけ、梱包、発送等の業務を行なう施設）をつくれといってきているという理由だけで、あんな市街地のど真ん中に不恰好な倉庫をつくるというんだからな。営業的なセンスを疑いたくなるよ」村山部長は靴で床を踏みならしながら云った。開発部と広い通路を隔てて、隣り合せの営業部の諸課長や主席課員達が十二、三人、同部提出議題の審議結果を待って黙然と坐っている方に向って、聞こえよがしに云うのである。ちょうど三木営業部長が、便所へ立って、席にいない間隙をついての言葉でもあった。

増田営業課長の短く刈りあげた頭が横を向き、聞き耳をたてたようであるが、村山部長は、それを知る由もない。

「そうですね、やはりあの土地は、立地条件や地価の高い土地の効率利用という観点から云っても、また、物流関係業務という、景気変動の影響を受けやすい当社業務の業績の不安定をカバーするためにも、収益の安定した賃貸事務所ビルを建設するのが最も適当ですからね」啓介は、村山部長の

考えに同調して意見を述べた。
しばらくして、三木営業部長が便所から帰ってきた。
「村山君、松本常務と渡辺常務が、例によって、しのぎをけずる論戦を展開しているそうだ。今、便所で水野常務にあったら、そんなことを云っていたよ。どうやら大勢では、物流加工施設案は後退しそうだ。まあ、営業部としては、社内の〝本業の積極的推進〟という意見を集約して、社長に進言し、その姿勢を買ってもらえば、目的を達したも同然だから、結果はどうだっていいんだが」
営業部長はゴルフ焼けした浅黒い顔を両手で撫でて云った。学生時代バスケットの選手であったと云われるだけに、長身のバランスのとれた立ち姿が、眼につく。
「相変らず、君らしい考えだな。まあ何れにしても事務所ビル建設案で落ち着くよ。それにしても、松本常務と渡辺常務は相変らずだなあ」
「社長のあと釜の先陣争いか、いい加減にしてもらわんと、われわれまで、そのまきぞえを食いかねんからな」
「全くだ、お互い、さわらぬ神にたたりなしでいこうぜ」
「開発部さえチョッカイをかけてこなければ、営業部は両常務の確執にこだわらず、相提携する用意はあるんだがな」
「あほぬかせ、営業部が松本常務の指示に忠実すぎて、本来渡辺常務に向けるべき鉾先を開発部に向けてくるから、こっちもつい、文句を云いたくなるんだ」
「何を云うか……」

同期のライバル同士の奇妙な会話に、周辺の待機社員達が苦笑する。
取締役以上が全員役員会に出席し、事務所のなかに上司がいない気安さの気持が、こんな会話を二人の間にさそうのであろう。
螢光燈が規則正しい間隔を置いて、普通のビルよりやや高い天井から吊り下げられ、幾筋も遠くまで連らなり、その下にスチール机が、各部課別に整然と並んでいる様は、資本金百八十億の会社の本社らしい雰囲気を感じさせる。
ただ古いビルであるせいか、内壁、天井の〃しっくい〃がところどころ剝離し、それを補修した跡が見られるのは、明治時代の創業にかかる同社の歴史から見て、やむを得ぬことではある。
毎月末開かれる役員会は、大抵夕方六時には終り、関係各部の待機者は閉会後、担当重役から提出議題の審議の結果を簡単に聞いて退社するのがならわしであるが、今日のように九時半を廻ってなお続行という事例は、一年のうちでも稀である。
静まり返った雰囲気のなかで、疲れによるのか、時々待機社員達のなかに、アクビが洩れる。
啓介はふと課員を五人待機させることの無意味さを悟って、後を振り返り、
「部長、主任技師達はもう帰してよろしいですか」と聞いた。村山部長は、椅子に背をもたせたまま、
「君だけ残っていてくれたら、あとはいいよ」とすぐ返事を返してきた。
啓介は、向い合って坐り、腕組みをしてお互いに語り合おうともしない技師達に、
「おい、みんな、疲れたろう。あとは、わしがひきうけるから帰れ」と指示する。
啓介の左前に坐っている川合技師が、

「今日はただの残業だから、役員会が終ったら、課長に一ぱいおごってもらおうと、さっき課長が便所に立ったとき、みんなで話し合ったんですよ」と笑いながら云った。啓介より三つ年上の三十八歳である。他の四人も何時の間にか眠気をさまして、啓介の顔を見る。

「よっしゃ、わかった。じゃ、梅田の地下の例のところで待っといてくれ。三十分ぐらいしたら、あとを追える筈だから」啓介は苦笑しながら答えた。

「もし課長がすっぽかしても、今日の飲み代は全部課長につけときまっせ」五十歳、最年長の高木技師が念を押してくる。

「いいだろ。しかし、俺は万難を排しても行くよ。あんた達みたいな底なしは、監視して、ブレーキをかけんと、わしの一カ月の小遣いが、一夜でふっ飛ぶからな」

「それが狙いですがな」

「あほぬかせ」

事務所のなかに、時ならぬ笑い声が洩れる。やがて技師達は、帰り仕度を終ると、階段の降り口に向かった。

開発課の処置にならってか、各課も次々に待機社員達を解放する。いままで落ち着いた雰囲気であった事務所のなかに、浮き足立った気配がながれる。

営業部長が隣りの広田物流開発部長に、大きな声で、

「われわれも重役をほっぱらかして帰るか」と冗談を云った。

「そうだな、そうするか」二人の笑い声が聞えてきた。

離れた窓際に坐っている村山部長が二人の会話にかすかな笑みを洩らし、腕組みして眼をつむる。再び事務所のなかに静けさがよみがえる。残っているのは課長、部長達だけである。

十時過ぎになってやっと役員会は終った。

二十七名の全重役が、次々に事務所へ姿を見せる。部課長の待機する事務所のなかを、ひと渡り眺め、間もなく、各所へ散ってゆく。奥の役員室の近くの総務課で、特別待機していた数名の秘書が、車の手配と重役の見送りのために、一斉に立ち上って消えてゆく。

渡辺常務が、肥えた体に似合わぬ敏しょうな足取りで、通路を真直ぐ、啓介達の方へ近づいてくる。短く刈りあげた白髪まじりの薄くなった髪のつけ根が螢光燈の明かりに映えて光る。ゴルフで日焼けした丸顔の精力的な顔には、疲れは見られない。

渡辺常務より、やや小柄な、スマートな体つきの松本常務が、足早にその横をすり抜け、営業部長席へ向かう。

部課長達は皆立ち上って、担当重役の到来を待ち受ける。

渡辺常務が、村山部長の席へやってきた。啓介も部長席の方へ行く。常務は、営業部長と小声で話し合っている松本常務の方を見たのち、

「事務所ビル建設案で最終的に決定を見たよ。営業担当の物流加工用施設建設という、根強い反発はあったが、なんとか、意見の一致を見た。問題は、これからの具体的な建設計画の推進と、施工業者の選定だ。それと当社の営業上の得意先である日東商事の建設部が、この工事に嚙んでこないように、情報が外部に洩れることを防ぐことだ。しかし、いずれは具体化の時点で、施工業者のう

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

えに乗っかかってくるとは思うがね。松本常務は、当社の本業の推進のためには、それもやむを得んと、すでに、役員会で意見発表をして、社長の内諾をとろうとしている。商社が嚙むことによって、契約工事金額がアップするのは、極力避けたいとは思うが、会社業務の全体的な運営上、あるいはやむを得んかも知れんな。まあ、その時は、そのときで考えよう。取り敢えずは、そんなところだ。くわしくは、また日を改めて云う」と役員会の審議の結論を手短かに、村山部長と啓介に伝えた。

そのあと常務は、村山部長に、「ほかに緊急用件はないな」と念を押し、足早に奥の常務室へ去っていった。

「さあ引き揚げようか」という村山部長の声に促がされて、啓介は帰り仕度をはじめた。

人っ気の少なくなった広い事務所のなかには、夜の寂しさの気配がただよう。部長達は、秘書からの連絡により、会社の車に相乗りで、梅田まで帰ることになり、打ち揃って事務所の外の廊下に面したエレベーターホールに向かう。啓介は、手近の電話で家へ連絡し、先に退社した主任技師達のあとを追うように、足早に階段の降り口に向かった。

それから一年経過した昭和四十五年八月十五日に本社ビル建設工事の起工式が建設現地で行なわれた。

施工は、建設業界でも大手の会社である高島建設と東組のジョイントベンチャー（共同企業体——共同施工の組織体）で行なうことになった。総工費三百五十億円、工事期間四年余という、当時と

しては破格の大工事のため、関係各社の社長級の人物以下が多数列席して、起工式典とそのあとの直会は盛大をきわめた。

午後一時前に施工業者の代表の居並ぶなかを、日東商事の副会長以下が、商社の威厳を示して式場を出、やがて車を連らねて、肥後橋の方向へ引き揚げたとき、啓介は高島建設の後藤工事部長と顔を見合わせた。

「後藤さんやっと終りましたね」

「そうですね」五十をすでに越えていると思われる後藤部長は落ち着いた声で答えて安堵の表情を見せた。

敷地の一角に仮設された大きなテント張りの式場には白い衣服をつけた設営業者の従業員が、跡片附けの準備に忙しそうに立ち廻る以外、人影は見られない。周囲の紅白の幕と、コの字型に配置された白いクロス張りのテーブル、正面奥の来賓席に飾られた、あでやかな盛り花、幕で仕切られた隣りの起工式場の奥の祭壇と、その前の三百を越える椅子の並びなどが、わずかに式典の盛大さの面影をとどめるだけである。

啓介の眼は、無意識に、遠ざかる日東商事の代表の車の列を追う。

〃起工式と竣工式に列席するだけで、三パーセント以上のマージンか……ざっと十四、五億の金をかすめとられたな〃と思う。

五月に日東商事の建設部が、共同企業体との工事請負契約のうえに、第一次契約当事者として嚙んできたとき、契約金額がつりあがったことを思い出したのである。

参列者が去ったあと、啓介は、式場と反対側の堂島川のほとりへ一人で歩いていった。

防潮堤越しに川の景色に見入った。

焼けつくような夏の陽ざしを浴びて、あるかなきかのゆるやかな流れが、両岸に立ち並ぶ大小さまざまのビルのあいだを縫い、肥後橋とその向うに無数に見える橋の重なりが商都大阪の街を象徴しているようであった。

昔、香川県の片田舎の小学校で、〝水の都、煙の都〟と国語の授業の際に習った、過去の大阪の街に対する夢のようなイメージは、もうどこにも見られない。わずかに左斜め前方に見える中之島公園の古風な建物と、それをとりまく木々の緑に、その面影が残っているだけである。

起工式の翌日から工事は開始された。

七千坪の敷地に二千坪の建築面積、地上三十階建、地下四階という、この工事は、大阪でも一、二を争う大工事である。

技術屋でない啓介には超高層ビルの建設について、専門的なことはわからなかった。そのため、最近、鹿島建設が建設した霞ケ関ビル（三十六階建）の建設記録フィルム（〝超高層のあけぼの〟）を見せてもらったり、本社ビルを設計した日本設計の技術担当者の説明を聞いたりして研究した。

関東大震災の際、周辺の建物が、すべて瓦解したなかにあって、浅草の五重塔だけが、強震にビクともしなかったことにヒントを得て、その原因についての究明のなかから、地震に耐え得る超高層ビルの特殊な柔構造の原理が解明されたという。

ちょうど田舎の村祭りに〝みこし〟のあとについて、長い槍を肩と手を巧みに使ってしならせながら垂直に保つ〝槍持ち〟の特殊技術と原理的に同じだとも教えられた。地震の多い日本において、この原理の解明とその実用化が、各社の従来の設備投資、特に事務所ビル建設についての考えを、根本的に変えていった。

土地を立体的に可能なかぎり有効に利用するという考えが支配してきたのである。東洋通運でも啓介達の進言によってこの考えが、本社ビルの建設について採用された。しかし、現実には、建築基準法による建物の高さ制限や、住民の日照権と関連する斜線制限にあって、工事計画の立案は、予想以上に難航した。これら以外に容積率（用途地域別に土地面積の何倍かの範囲内の容積をもった建物しか建てられないとする法の規制）や建蔽率の制限も考慮しなければならない。

一方、都市再開発法による将来の都市開発計画、特に大阪市の場合には、以前から出されている中之島再開発計画との関連も検討が必要であった。

啓介は、課の一級建築士や設計会社、建設会社の専門的意見を聞き、また市の建築審査課や開発課の意向を打診しながら、これらの問題点を一つ一つ解決していった。

その基礎固めのうえに立って重役会で決まった方針を考慮し、関係各部の意見を聞きながら、基本レイアウトの作成に約一ヵ月かけ、それが固まると、日本設計と高島建設に流し、約六ヵ月の日数をかけて設計図を完成し、工事着手の三ヵ月前、市の建築審査課へ建築確認申請書を提出する段階まで、こぎつけた。

二年前、三十四歳で開発課に赴任して以来、現在まで設備投資用の土地購入や開発計画の検討、

倉庫の建設工事や営業用の大型機械の購入など、課の他の仕事の並行処理と併せ、自分の力の半分以上をこの工事の着手に注いだのである。

それは長い道程であったが、瞬く間にすぎてしまったと云えば、そのようにも思われる。

〃あと四年……この工事が終る頃には、俺は惑わずの年齢を越えることになる〃仮設建物建築のための資材がトラックで運び込まれ、敷地周辺の仮囲いの作業が進められるなかに立って、啓介は、そのようなことを考えることがある。それは一面では、同じ仕事の明け暮れのなかで、年をとるという寂しさの気持を伴ったが、反面では、年月の経過とともに、自分の胸に描いている夢が、現実の姿となってあらわれる創造の喜びの道程であるとも思われた。

工事開始後、五日が経った。夕方、五時を過ぎて一日の作業が終り、手仕舞いが行なわれる頃、啓介は現場をあとにした。

仮設現場と敷地の仮囲いが完成する四、五日後から、PW杭（地面を掘り進むと、周辺の土が崩れるので、それを防ぐために、予め建物を建築する部分の周囲に、コンクリートパイルを地下深く密接させて打ち込み、それが連続して壁のように建築部分の土地を囲むようにする。そのようにしておいてから、その囲いの中の地面を掘削する。そして或る程度掘削が進むと後述のように打ち込んだコンクリートパイルが土圧で内側に倒れるのを防ぐために突っ張りの梁〔切梁〕を入れる。PWは、そのコンクリートパイルの壁という意味である）の杭打工事が始まると思いながら、折からの帰宅するサラリーマンで雑踏する肥後橋の通りを、大阪駅の方向へ向かって歩いた。

今日はどこかで一杯飲んで帰ろうと考える。歩道をところ狭しと歩く人々の群の中を、啓介はさ

わやかな気持で歩いた。

一カ月あまりが過ぎた。季節は秋に入り、日毎に暑さが遠のき、しのぎやすくなった。スモッグでよごれた大阪の空も、時折、透きとおるような青さを見せることがある。PW杭の打込みも工程表どおり、順調に進み、二週間もすれば、終る予定である。

共同企業体の井関所長や川畑副所長、その下の何人かの技術職員とも、親しく話し合えるようになった。PW杭を打ち込む音が、近隣から、騒音公害の訴えをおこしはしないかと心配したが、打ち込みを日中に限定したことと、周辺に住宅が少ないこともあって、特に問題は生じなかった。

高島建設の後藤工事部長や東組の山本工事部長が、建設現場へ姿を見せ、耳をつんざくような打ち込み音の中で、工程の打合せを行なうこともある。ナッパ服に鉄カブトという毎日の服装にも奇異な感じを抱かなくなった。プレハブ造りの仮設事務所の二階で、机を並べて、一日中、設計図の作成や工事の技術的な打合せに明け暮れる両社の技術職員の充実した仕事振りを見ていると、同じ仲間としての親近感が湧いてくる。

二年間の苦しかった工事検討期間の生活が今は頭のなかから遠のいていた。

しかし、啓介の充実した生活は長くはつづかなかった。大工事にありがちな〝事故〟が発生しはじめたからである。

PW杭の打込みが予定どおり終り、建物を支える本杭の現場打ち工事のための掘削にかかっていたとき、地下約四メートルのところに長さ五十メートル余にわたって、帯状の幅約二メートルの堅

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.